



ZENBUTSU

全仏

No.
588

仏暦2556年4月
[2013年]



シンポジウム「いのちと原子力②」講演者 左：松井英介氏・中：田中徳雲氏・右：鎌仲ひとみ氏

目次	副住職とネット社会	
	西出 勇志(共同通信社 編集委員)	2
	本会シンポジウム	
	シリーズ「いのちと原子力②」——放射能被害とは—— 開催	4
	第30期 第2回 人権問題連絡協議会 開催	6
	東日本大震災第5次支援金申込に関するご案内	7
	InterFaith (諸宗教間交流) 駅伝参加者募集	8
	BNN「寺院備災ガイドブック」4月1日頒布開始	8

副住職とネット社会

共同通信社編集委員 西出 勇志

最近、二十代、三十代の若手僧侶と話をする機会が増えた。そこで彼らと交わす会話が、実に楽しく刺激的なのである。

僧侶の日常から現代における仏教の在り方まで、語り合う内容は多岐にわたる。酒席での雑談などでも、ざっくばらんな中に未来を切り開くアイデアのきらめきや現状を変革しようとする強い意志を感じ、その姿に感心させられることが多い。宗教界、特に仏教界と長年接してきた筆者にとっても、これまでにあまりなかった経験である。

考えてみれば、取材を通して出会ってきた仏教者は、壮年から熟年世代の役職者、あるいは名のある老僧がほとんどだった。法話を聞くにせよ、教団運営のありようや仏教界の現状を問うにせよ、組織の中核や大きな足跡を残してこられた方たちとのやりとりが中心で、若手と接触する機会が少な

ったのも当然と言える。

◇ ◇ ◇

一般のビジネス社会と異なり、仏教界は還暦後の六十代が「これから」の現役世代である。七十代、八十代が第一線で元気に活躍する世界だ。年齢を重ねた僧侶の中には、「生」の深みから滲み出てくるようなありがたさを醸す方が確かにいる。これぞ仏教界ならではのと思う。ただ、あまりにもシニア層が分厚く、教団ごとの行動を中心とする仏教界にあつて、若手が活躍できる場が少なかったのではないか。メディアに所属する筆者も彼らの思いに目が届かなかったと言えるだろう。

それが大きく変わったのはごく最近のこと。さまざまな現場に若手が躍り出てきたのである。

最大の理由はもちろん、インターネット社会の成熟にある。ほとんどの人がパソコンやタブレットPCでインターネットを使うよう

になり、スマートフォンも爆発的に普及した。ソーシャルメディアも急速な発達を遂げ、中でも短文投稿サイト「ツイッター」と交流サイト「フェイスブック」は、日本社会の人間関係を劇的に変貌させたと言っている。年齢や性別、社会的地位、所属団体に関係なく、気軽にやりとりができる場の出現は、宗教界にも大きなインパクトをもたらした。「何かに取り組みたい」との思いを抱く若手僧侶の連携を容易にした。そして、つながりを持った全国の僧侶、仏教サポートとも呼べる層がネット上で出会い、それが現実社会での共同の営みへと発展していく。彼らは仮想空間と現実空間を往還しつつ、交わりを広め、かつ、深めていく。

こうしたネットワークで最大の成功例は、インターネット寺院「虚空山彼岸寺」だろう。耳目を引く新しい試みの多くは、ここが発信地と言っても過言ではない。興味深いイベント、独創的な取り組みをする僧侶が紹介されている情報集積地でもある。経営の視点からお寺の社会的役割を問い直し、注目を集める人材養成プログラム「未来の住職塾」（松本紹圭塾長）もここから出てきた。「彼岸寺」のサイトをのぞくと、仏教界の新しい流れと可能性が見える。

インターネットを用いた新しいネットワークは、若手の社会貢献活動にも大きな変化をもたらした。僧侶間、仏教間のネットワークだけではなく、宗教間、ひいては他のNPO法人などとの協力関係を構築するようになってきている。社会とより積極的にかかわろうとする僧侶たちの動きは、一昨年に起きた東日本大震災でぐっと加速した。

◇ ◇ ◇

東日本大震災は宗教をめぐる風景を一変させた。経済効率優先の戦後日本で、社会の後景に沈んでいた宗教がくつきりと姿を現したのである。突然の大量な「死」の出現と、大自然の力のすさまじさが、古来の無常観とともに宗教的感覚を呼び起こした。被災地が仏教文化の色濃い土地でもあり、特

に仏教、仏教者の活動への注目が高まったのも当然と言える。

粉雪が舞うがれきだらけの被災地で、ひたすらに祈りを捧げながら歩く僧侶の姿に多くの人が心を打たれ、葬送の現場や大切な人を失った喪失体験において宗教の言葉や儀礼の力が再認識された。こうした事態は、ステレオタイプな葬式仏教批判に再考を迫る一方、仏教者に対しては葬送及び「死」との向き合い方についての姿勢を問い直す結果となった。戦後日本においては主に習俗として機能し、それが従前のように働かなくなりつつあった「仏教」が、宗教そのものとして「再発見」される大きな機会になったのである。ただ、残念なことに、教団の姿はここで微かにしか見えない。

震災支援ではもちろん、各宗派が多様な活動を展開した。多額の義援金を届けたり、救済物資を送ったり、人的サポートを行ったり、非常に大きな貢献を果たしてきたと筆者は考える。ただ、主に注目を集めたのは、教団単位ではなく、

自主的に形成されたネットワークによる活動だったのである。

◇ ◇ ◇

斬新性にあふれた興味深いイベントにせよ、被災地支援の活動にせよ、若手を中心としたネットワークがこの間、随分強化された。その特色は何か。キーワードは、やはり「超宗派」だろう。しかもかなり実質性、具体性を伴った超宗派活動である。

教団内の論理をいったん離れ、軽々と垣根を乗り越えて横断的連携を結んで自在に活動を展開する。これまでにほとんど見られなかった動きであり、それが一大潮流となりつつある。既成概念を打ち破り、活性化のための画期となるムーブメントの期待も高まる。真摯な姿勢で自らの在り方、行く末を考えている彼らと対話することが、だからこそ、楽しいのだと気づく。彼らの多くは次代の寺院を担う副住職である。裾野の広い仏教ブームは今も継続中だが、仏教界の現状は決して明るいとは言えない。人口動態の劇的変動と世代間意識

のギャップがもたらす変化は、寺院環境をも大きく変貌させている。その切実な危機感が、根本から自らの存在意義について考え、同様の意識を共有する僧侶たちと宗派を超えて連携することに帰結するのは当然だろう。ソーシャルメディアを駆使した横断的活動は、仏教界だけではなく、宗教界全般に大きな影響を徐々に及ぼすはずだ。特に「宗派」の在り方を問い直すインパクトを秘めているかもしれない。

◇ ◇ ◇

そこで教団である。若手僧侶たちの活動から目を転じると、一般社会との距離感がどうしても気になる。宗教の公共性が問われる中、社会におけるプレゼンスのさらなる発揮が求められていくはずだが、これにきちんと応える用意があるだろうか。教団システムはどうだろうか。一種の制度疲労を起しているのではないだろうか。この激変期への対応を議会は適切に果たしているだろうか。

社会的存在としての教団には大

きな意味がある、と筆者は考えている。だからこそ、副住職を中心とした若手僧侶の活動を支援し、その思いやアイデアを取り込む中で宗派を活性化させていくことができるか、と思う。横断的連携は今後、ますます重要になる。その広がりや深まりを応援したいと考えると同時に、教団という堅牢な構造にこれまでにない柔軟性が生まれ、活性化することも願う。

西出 勇志（にしで・たけし）



一九六一年京都市生まれ。八五年に共同通信社入社。浦和、長崎、京都支局を経て文化部。二〇一一年から編集委員兼論説委員。約二十年にわたって宗教界を取材、現在は信仰と社会の最前線を探る「こころ」企画を担当。近刊の「宗教と現代がわかる本 2013」（平凡社）に、若手宗教者に関するルポを執筆した。共著に「アジア戦時留学生」（共同通信社）など。

シンポジウム「いのちと原子力②」―放射能被害とは―開催

三月八日、東京・西新宿の損保ジャパン本社ビルにて本会主催の標記シンポジウムが開催され、一般の方を中心に、約二百名が参加した。

開会に先立ち、本会救援基金より支援を行った被災地支援団体の活動状況の写真をスライド上映した。

午後六時よりシンポジウムが開会。東日本大震災で犠牲となられた方々と、今もなお避難生活を余儀なくされている方々へ心を寄せるべく黙祷が捧げられた。その後、



会場には多数の参加者が詰めかけた

小林正道本会理事長が「今回のシンポジウムでは、人々の未来に関わる問題について、宗教者を含めてどのように対応をしていくかを皆様と共に学びたい」と開催の趣旨を述べた。

本シンポジウムでは、第一部で、各パネラーが二十分ずつ講演し、第二部はパネルディスカッションを実施した。

第一部 パネラー講演

○鎌仲ひとみ氏（映画監督）

被ばくに関する映画製作を多数手がけた鎌仲氏は、「被ばくりテラシー」と題したスライドを用いて講演。日本は世界で唯一の被ばく国と言われながら、被ばくに関する教育は「ほとんどなされていない」と指摘。正しい知識を深めていくことが、「子ども達を被ばくから守るためには重要」と訴えた。

「現在の最優先課題である」と述べた。

劣化ウラン弾や放射性物質に関する取材の為、イラクや青森の六ヶ所村を訪れた時から、様々な場

面で被ばくに対する理解に関して「多くの壁がある」と述べ、原子力産業を推進することにより経済的に恩恵を受ける団体が、意図的に「被ばくを過小評価」するなど被害の隠蔽をしており、低線量被ばくの人体への影響も、無害を主張する団体と憂慮する団体に分かれていますと、具体的団体名を挙げて説明した。

さらに、被ばくに伴う重大な影響として、社会的にさまざまな差別が降りかかる可能性を指摘し、これにより地域の分断が起きていること、差別を恐れるあまり結局泣き寝入りしてしまう懸念があることなど、広島原爆の被害者取材した際にも同様の現象が見られたと述べた。講演中、鎌仲氏製作映画「内部被ばくを生き抜く」の一部が上映された。

○田中徳雲氏（同慶寺住職）

田中氏は福島原発から十七キロの小高区同慶寺と、九キロの双葉町仲禅寺の住職であり四児の父。原発から二十キロ圏内のために居住が許可されず、家族は福島県に避難して、自身が福島と福井を往復する

生活を送っている。

田中氏は講演中に会場内の聴衆を三ブロックに分け、「ここまでは補償が出るが強制移住、ここまでは住んでも良いが補償も出る、ここからは補償が一切出ない、とされたら、これで生活がうまく行くとしますか」と、原発被害に対する東京電力の補償内容について説明。補償は「放射線量を基準とするのなら何の問題もないのに、距離での補償により様々な問題が出ていて、地域と人間関係が分断されている」と現状を訴えた。

自身も福井と福島の二重生活を強いられ家族も限界に達し、今年三月にいわき市に家族で戻る決断をしたことにも触れ「避難をするのも留まるのもどちらも大変で、選択を強制される」ことが大いに問題と述べた。講演では、震災発生後から今までの境内や周辺の様子を記録した写真が紹介された。

○松井英介氏（医師）

松井氏は呼吸器病学と放射線医学の専門医。

講演では「放射線は距離の二乗に反比例して弱くなるため、発生

源から離れることは有効」だが、食品等を通じて人体に入る「内部被ばく」をした場合はセシウム、ストロンチウム九十、プルトニウム等が α 線、 β 線を出してDNAを切断し、人体に様々な影響を与えることを述べた。食品の放射線検査に関して、加工品はほとんどノーチェックであるという危機的状況が語られた。

また、チェルノブイリ事故の影響の具体例として、ベラルーシでは三年後から急速に甲状腺がんが増えたこと、出生率が落ちて死亡率が上昇したことなどを紹介。特に子どもは成長の過程で多くの物質を取り込むために影響を受けやすく、福島県の子どもに対して行った甲状腺エコー検査では「甲状腺がん」が三人、「疑い」が七人検出されたことを報告し、その対策として「脱被ばく」が急務であり、家族揃って被ばくの影響が少ない地域に移住できる、自身が提唱する「脱被ばく移住法」を制定することが重要であると訴えた。

第二部 パネルディスカッション

戸松義晴氏（浄土宗総合研究所



パネルディスカッションの様相

主任研究員）をコーディネーターに迎え、主に参加者からの質問を要約して、各氏から回答をいただいた。

問「子ども達を守るために移住や保養が必要という声と、現地に残りたい、あまりもう原発被害に関して騒いでほしくないという声があるがどう思うか？」

鎌仲氏「土壌などの線量を計測、公開し移住か留まるかの判断をしてもいい、それぞれ適切な補償を」

田中氏「数百年続いた土地を捨てるのは心情的に難しいし、年配者の『仮設住宅では死にたくない』

という悲痛な声も聞く。避難する人、留まる人それぞれにより手厚い補償をすべき」

松井氏「子どもを放射線の低い地域に滞在させる『保養』の取り組みは世界的にも有用性が確認されており、保養を進めることにより受け入れ地域と被災者の手が繋がり、集団移住が実現する可能性も高まるのではないか」との回答。

また、鎌仲氏は「これくらいの放射線量は大丈夫、愛着もあるんだからその土地に住もうよ」という世論形成が圧倒的に大きく、顔が見える関係を地道に作るしか方策がない」のが現状と語り、松井氏は「莫大な資金力を持つ原子力産業が各方面に資金提供を行っており、そうした世論形成が行われている」と背景を説明。田中氏は「顔が見える関係を作る役割を担うのが寺院の役割。全国に七万五千と言われる寺院のネットワークを最大限に生かすべき」と語った。さらに、避難区域に在住している来場者から、次の質問が寄せられた。

問「八百年続いたご先祖様のお墓参りもできず、お守りできない

ことを悔いている。自分も先祖代々のお墓に入る事はできないのはわかってはいるが、どう考えたら心静かに死ぬことができるか？」

田中氏はまず、警戒区域に入る際には申請が必要だが、物の搬出に限り許可がおりる。しかし納骨には『政教分離』を理由に許可がおりない現状を説明した。それでも重ねてお願いをすると『物の搬出という名目で申請を出し、ついでに納骨してくれ』とアドバイスを受けるのだが、納骨を『ついで』と考えるのは親族の思いを踏みにじる行為であると思う。お墓参りをする権利、お墓に入る権利といった当たり前の権利が得られるよう、仏教会等と協働して行政に働きかけていきたい」と語った。閉会にあたり関崎事務総長が「留まるにも移住するにもどちらにしても苦しみがあり、これから被災地の方々の心に寄り添い続けていきたい」との閉会の挨拶を述べた。今後本誌では、パネル・コーディネーター各氏からの寄稿及び当日のアンケート結果の集計・分析結果を掲載予定。

第三十期 第二回 人権問題連絡協議会開催

本会加盟団体の人権問題担当者を対象に、標記協議会を二月十九日に長岡京市の京都西山短期大学を会場に開催し、隣接する西山浄土宗宗務所の職員やマスコミを含む約六十名が参加した。

今回の協議会は、福島第一原発事故を契機に発生しつつある、さまざまな人権問題について、篠原鋭一師（成田市曹洞宗長寿院住職・曹洞宗人権啓発相談員）を招き、「福島原発事故による人権問題について」引き裂かれたもの」と題した講演を通して、参加者と被災地における人権問題について意見交換をした。



講師 篠原鋭一師

「生きること」をテーマにした講演をするなど、積極的に活動をしている。また、宗教系情報誌に連載記事を寄稿しており、福島の被災地から避難して来た若い夫婦による、放射能被害の実態に関する命懸けの訴えを紹介するなど、被災者の実情を各方面へ積極的に発信している。

○第一部 篠原師講演

冒頭に「わたしたちは棄民だ。日本国に捨てられた棄民なんだ」「私たちは流浪の民になってしまった。このままでは難民になってしまう」など、実際の被災者の声を紹介し、「原発は人間であることを奪った」と指摘した。次に、飯館村の成人に対してのアンケート調査を報告し、「未来への不安や住む場所を奪われた喪失感が心身を蝕んでいる」と述べ、「様々な苦しみによって自身の存在が否定され、自死を考える人が増加している」と切迫した被災者の実情

に対する理解を求めた。また、過去のハンセン病患者への対応と比較して、同じような事象が起りつつあることを指摘し、「絶対に作ってはいけない」と強く訴えた。さらに、宗教家ができることとして、「新しい人間関係づくり」をあげ、「人は人を必要としている。苦しみを語り合える人を求めている。差別の苦しみを共感し共に正しい情報を伝えるミツシヨンが我々のはたすべき使命である」と述べた。そして、「お寺をほっと出来る場所として、僧侶はほっと出来る相手として、支援活動にあたってほしい」と対話活動による支援を求めた。

○第二部 質疑応答

参加者からは「被災地に寺院施設が少ないため現地に足場が無く、情報不足の中でどうすればより良い支援活動が出来るのか」「どうしたら現地の人々の中に入っていけるのか」などの質問があり、篠原師は自らの体験をもとに「現場に足を運び、現地の情報を自分で



第30期 第2回 人権問題連絡協議会

感じてほしい」「被災地の地元新聞記事を見て情報を得ることが有効」など、質問に対し熱心に答えた。また参加者からは本会に対して「リーダーシップを発揮し、現地に関連する情報を加盟団体に対して発信してほしい」旨の要望があった。

最後に、関崎事務総長が「本会として今後も今日のテーマに関心を持ち続け取り組んでいきたい」と述べ閉会した。

事務総局録事

二月（十六日～二十八日）

- 十八日▼第一一七回曹洞宗宗議会議出
席（～二十二日）（曹洞宗宗務庁）
- 十九日▼（社）全日本仏教婦人連盟修正会・懇親会出席（東京青山善光寺・明治記念館）
- ▼芝税務署・（公社）芝法人会主催公益法人等に対する説明会出席（虎の門ニッショーホール）
- ▼第三十期第二回人權問題連絡協議会開催（京都西山短期大学）
- 二十日▼平成二十四年度第二回広報委員会開催（真宗大谷派宗務所）
- ▼京都宗教記者会定例懇談会開催（京都SESA MI）
- 二十一日▼第一六五回宗教法人審議会及び懇親会出席（文化庁・霞が関初っぱみ）
- ▼東映（株）村松氏・相原氏・富永氏・杉田氏・荻野氏来局

二十二日▼（公財）国際仏教興隆協会第三回理事會出席（増上寺會館）

二十三日▼十月舎増永氏来局

▼オメガコム五十嵐氏来局

▼凸版印刷古屋氏来局

二十四日▼民主党二〇一三年度定期大会参加（ホテルニューオータニ）

二十五日▼シンポジウム記者会見開催（事務総局會議室）

二十六日▼第四回WFB日本センター運営委員会開催（事務総局會議室）

二十七日▼トーマツ水上氏・和久井氏来局

二十八日▼（公財）日本宗教連盟第十回幹事會出席（明照會館會議室）

三月（一日～十五日）

一日▼参議院自由民主党全日本仏教議員連盟勉強會出席（自由民主党本部）

無料法律相談室

三日▼部落解放同盟第七十回全国大会参加（全電通ホール）

四日▼新日鉄住宅建材広田氏他来局

局内會議

五日▼第四十二回全日本仏教徒會議和歌山・高野山大会第三回実行委員会出席（和歌山県平和會館）

▼大和証券（株）主催『公益社団・財団法人』セミナー参加（大和証券本店）

▼日蓮宗第一〇五定期宗會出席（日蓮宗宗務院）

▼朝日新聞社宮本氏来局

▼日本都市計画協会高畑氏来局

▼ヤマトシステム八木氏来局

六日▼BNN企画委員会出席（庭野平和財団）

▼オメガコム五十嵐氏来局

八日▼本会シンポジウム「いのちと原子力②」開催（損保ジャパン本社ビル）

十日▼都内戦災・関東大震災遭難者春季慰霊法要参列（東京都慰霊堂）

十一日▼全日本仏教青年會主催追悼慰霊・復興祈願法要参列（福島市音楽堂）

十二日▼（公財）日本宗教連盟第十一回幹事會・第四回理事會出席（事務総局會議室）

▼Interfaith 駅伝打合せ（京都マラソン事務局）

▼関西支局運営委員会出席（京新山）

十四日▼（公財）国際仏教興隆協會第二回評議員會出席（増上寺會館）

▼東映（株）村松氏・富永氏・荻野氏来局

十五日▼A B S 山中氏来局

東日本大震災第五次支援金 申込に関するご案内

第五次支援金拠出は三月三十一日をもって終了しておりますが、申込期間の締日と活動期間の締日が同日となっておりますので、活動期間内の申請であれば受付いたします。

至急お申込ください。

一、申込期間

平成二十五年三月三十一日（日）まで（活動期間内申込可）

二、支援対象

・被災地支援団体（平成二十四年十二月一日から平成二十五年三月三十一日までに活動したもの）

・避難者受入寺院（まだ申請をされていない寺院）

三、支援金額

一団体につき十万円

その他、申込に関する詳細及び申込用紙は本会ホームページをご覧ください。

全日本仏教会ホームページ
<http://www.jbfn.jp>

公益財団法人 全日本仏教会

～ルクセンブルクINGナイトマラソン併催～

InterFaith(諸宗教間交流)駅伝参加ツアー

募集要項

◆旅行期間／

2013年6月5日(水)～6月11日(火)

◆ご旅行代金／駅伝参加者(お二人様一室利用)

(成田発着) 273,000円 (駅伝参加者)

一般参加(駅伝不参加)の方はプラス30,000円

※燃油サーチャージ約54,600円及び空港税が別途必要となります。

※下記内容をお申し込みの場合は、別途費用となります。

◇1名1室利用追加料金：駅伝参加者…13,000円、一般参加者…65,000円

※海外旅行傷害保険は含みません。全員の方のご加入をお勧めいたします。詳しくは説明会でご案内させていただきます。

※参加状況に応じて、国内発着空港を統一させていただく場合がございます。

※駅伝は、4区あり。最長区間距離は8.5km、最長区間距離は13.3kmとなります。

◆参加資格／

全日本仏教会加盟団体関係者及び賛助会員

※ただし、駅伝参加希望の方は、僧侶有資格者に限ります。

◆募集人員／(詳細はお問合せください)

20名(最少催行人員／成田、関空合計で15名)

◆添乗員／

全行程添乗員が同行しお世話いたします。

◆食事条件／

朝食5回・昼食3回・夕食3回(機内食は含みません)

◆利用予定航空会社／

KLMオランダ航空・ルフトハンザドイツ航空

◆利用予定ホテル／

駅伝参加者…修道院、ホームスティ、NHルクセンブルク

一般参加者…NHルクセンブルク

◆申込締切日／

2013年4月30日(火)

◆お問合せ／申込先

近畿日本ツーリスト京都支店(担当：石田)

TEL. (075)221-7401

■日程表

日次	月日曜	発着地/滞在	現地時間	交通機関	備 考	食事
1	2013年 6/5 (水)	関 成 田 発 アムステルダム着 ルクセンブルク着	午前 午前 午後 夕刻 夕刻	航空機 航空機 航空機 専用バス	アムステルダム経由、ルクセンブルクへ 一路、ルクセンブルクへ 着後、修道院またはホテル(マラソン不参加の方)へ 【ルクセンブルク(修道院)泊】	× 機 夕
2	6/6 (木)	ルクセンブルク滞	終日		修道院またはホテルにて朝食 修道院にてワークショップ ※マラソン不参加の方はホテル宿泊 【ルクセンブルク(修道院)泊】	朝 昼 夕
3	6/7 (金)	ルクセンブルク滞	午前 午後 19:15～ 21:30	専用バス 専用バス	修道院またはホテルにて朝食 ルクセンブルク大司教・表敬訪問 大使館・表敬訪問 宗教者のみ レセプション・バスターパーティー ホームスティ(インターフェイスプログラム) ※マラソン不参加の方はホテル宿泊 【ルクセンブルク(ホームスティ)泊】	朝 昼 夕
4	6/8 (土)	ルクセンブルク滞	終日	バス/専用バス 専用バス	ホストファミリー宅にて朝食 ルクセンブルク市内観光 旧市街ウォーキングツアー マラソンスタート会場集合 諸宗教間の集いと祈り、集合写真撮影 InterFaith 駅伝・スタート ※マラソン不参加の方はホテル宿泊 【ルクセンブルク(ホームスティ)泊】	朝 昼 ×
5	6/9 (日)	ルクセンブルク滞	9:45～ 11:15 午後	専用バス	ホストファミリー宅にて朝食 レセプション・表彰式 会場よりホテルへ 自由行動 ★[OP] 古城ヴィアンテンとモーゼル川 ワインセラー巡り 【ルクセンブルク(ホテル)泊】	朝 OP ×
6	6/10 (月)	ルクセンブルク発 アムステルダム着 アムステルダム発	午前 午前 午後 午後	専用バス 航空機 航空機 航空機	ホテルにて朝食 専用バスにて空港へ 一路帰国の途へ 関空便出発 成田便出発 【機中泊】	朝 機 機
7	6/11 (火)	成 田 着 関 空 着	午前 午前	成田便、到着 関空便、到着 通関後、解散		機 × ×

※発着日時及び交通機関は都合により多少変更になることがありますのでお断りください。
 ※食事条件は次のとおりとなっております。朝/朝食 昼/昼食 夕/夕食 機/機内食 ×/各自
 修道院での宿泊、並びにルクセンブルク大司教・表敬訪問につきましては、駅伝参加人数を大司教にお伝えした上で日程調整となります。
 現状、駅伝参加者20名見込みとして調整を進められませんが、協賛側と協議しております。
 ※一部の参加者の宿泊はホテルとなります。また、公式行事に行いては参加出来ない場合がありますので別途観光をお楽しみください。

BNN「寺院備災ガイドブック」頒布開始

東日本大震災では、東北地方を中心に多くの寺院が、地域の被災者を受け入れる避難所となり、寺院が長い歴史の中で説き続けてきた「いのち」と「人と人が助け合うこと」の大切さを人々に示す場所となりました。同時に、そんな災害と向かい合った方々の貴重な意見が、全国の寺院へ届いていないという現状もあります。

そんな中、BNN(仏教NGOネットワーク)では、「備災(災害に備える)」をテーマに、東日本大震災で被災した、また避難所となった寺院からの意見をまとめた、「寺院備災ガイドブック」を作成しました。寺院固有の備えるべき災害対策を中心に、「今、寺院が寺院に伝えたい」情報をイラストとともに紹介した一冊になっています。

内容は、「備えておけばよかったもの」「苦労したこと」など、寺院目線での備えを具体的に紹介し、避難所を開設することを想定したマニュアルや、風水害・火山噴火・原発事故などへの備災知識、怪我への対処法として緊急医療処置法も掲載しております。さらに、そのまま使用できる避難者名簿や備品チェックリストも掲載されております。

「起こるかもしれない」「まだしていない」寺院の災害の備えとして、本ガイドブックをご活用いただければ幸いです。

発 行：BNN(仏教NGOネットワーク)

協 力：(公財)全日本仏教会 (公財)仏教伝道協会 (公社)全日本仏教婦人連盟

頒 価：500円/1冊(送料込) 体 裁：A4版カラー60ページ

申込先：BNNホームページ(<http://www.bnn.ne.jp>)よりお申込ください※ガイドブックを活用した研修セミナーも企画しております ※詳細はBNN(office@bnn.ne.jp)までお問い合わせください